様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：17401041
研究課題名（和文）　世界の開発援助機関と援助活動に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）　An Anthropological Study of Development Agencies and Their Aid Activities in the World

研究代表者
田村　克己(TAMURA　KATSUMI)
国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
研究者番号：40094156

研究成果の概要：本研究は、世界各国の開発庁や国連機関、国際的な NGO や NPO とそれらの援助活動を調査することを目的として、アメリカやイギリスなど世界各国の開発庁、ワールドバンクや国連環境計画などの国連機関、グリーンピースなどの開発支援 NPO・NGO の目標、基本方針、開発援助プロジェクトとその実際の活動、文化人類学など社会科学が開発援助プロジェクトの立案・実施・事後評価において果たす役割を調査し、比較した。さらに、現地の開発援助活動やそれらの諸影響をグアテマラやケニア、ミャンマー、タイなどで調査し、個々の開発援助機関の開発実践を検討した。欧米の開発援助機関では、開発の事前調査やプロジェクト立案、プロジェクトの事後評価の分野において文化人類学者や文化人類学的な知見を活用していることが判明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	4,600,000 円	0 円	4,600,000 円
2006 年度	3,400,000 円	0 円	3,400,000 円
2007 年度	2,400,000 円	720,000 円	3,120,000 円
2008 年度	2,700,000 円	810,000 円	3,510,000 円
年度			
総　計	13,100,000 円	1,530,000 円	14,630,000 円

研究分野：文化人類学、開発研究、文化人類学の社会的活用
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学･民俗学
キーワード：文化人類学、開発援助、国際協力、開発援助機関、国際貢献

１．研究開始当初の背景

文化人類学が社会的な要請にいかに応えていくかは、現代の文化人類学に課せられた重要な課題のひとつである。文化人類学者のおもな調査地は、アジアやアフリカ、オセアニア、南アメリカなど第三世界であり、現地の人々が開発援助と深く関係している。技術援助であろうが、医療保健援助であろうが、現地に通暁した文化人類学的な知識を活用すれば、より適切な開発援助が実施できるはずである。このような問題意識のもと、主要な欧米国の開発援助機関で文化人類学者や文化人類学がどのように活用されているかを把握することは、日本の文化人類学の将来を考えるうえで重要であった。

２．研究の目的

本研究は、世界各国の開発庁や国連機関、国際的なNGOやNPOとそれらの援助活動を調査することを目的としている。すなわち、アメリカ、イギリスなど世界各国の開発庁、ワールドバンクや国連環境計画などの国連機関、グリーンピースなどの開発支援NPO・NGOの目標、基本方針、開発援助プロジェクトとその実際の活動、文化人類学など社会科学が開発援助プロジェクトの立案・実施・事後評価において果たす役割を調査し、比較する。さらに、現地の開発援助活動やそれらの諸影響を現地で調査し、個々の開発援助機関を検討することにより、より妥当な開発援助のための提言を行う。

３．研究の方法

(1)世界銀行（アメリカ)、イギリス国際開発省、開発研究所（IDS)、サセックス大学（以上、イギリス)、社会研究所（ISS)、オランダ外務省（以上、オランダ)、ノルウェー開発協力庁、ベルゲン大学（以上、ノルウェー）など、欧米の主要な開発援助機関、研究機関を訪問し、開発の理念・目標や実施の現状、文化人類学の活用などについて関係者から情報を収集した。

(2)ケニア（ケニア医学研究所の活動、JICAのとりくみ、国際NGOハビタット・フォー・ヒューマニティの住宅建設支援）やミャンマー（博物館による文化開発)、タイ（ソンダーダム建設が地域社会に与える影響)、ベトナム（文化遺産の保存、JICA のとりくみ)、グアテマラ（NGO による平和構築とコミュニティ博物館の建設)、ペルー（世界遺産チャビン・デ・ワンタル遺跡の社会的活用）などの開発援助の現場においていかなる開発実践が行われているか、いかにして人類学的知見が活用されているかについて現地調査を実施した。

(3)国内外から開発援助の実務者や研究者を招へいし、ワークショップ・シンポジウムを開催するとともに、開発研究と実践人類学における研究者・実務家ネットワークの構築を行った。2005 年 11 月には国際シンポジウム「カナダ国際開発庁と世界銀行における人類学者・社会学者の役割――社会評価と参加型開発、社会の安全配慮」を、2006 年 11 月には国際シンポジウム「ノルウェーの開発協力――ベルゲン大学、クリスチャン・マイケルセン研究所、NGO」を、2007 年 12 月には国際シンポジウム「オランダの社会研究所（ISS）と NGOs および世界銀行の国際協力」を開催した。

４．研究成果

(1)アフリカやアジア、ラテンアメリカなど諸外国における欧米諸国の援助機関による開発プロジェクトの計画や実施、評価において、文化人類学(者)が重要な役割を果たしえることを確認し、その具体的な内容についての知見を、国立民族学博物館を会場とする国際シンポジウム、国内外での学会発表、多数の研究論文等（下記「主な発表論文等」参照）において発信した。

(2)国立民族学博物館と開発の実務家や国際協力機構、日本文化人類学会との研究上の連携が実質化し、実践人類学を展開するための基盤を形成することができた。本研究終了後もこれらの基盤による共催セミナー・シンポジウム等を継続的に実施しており、実践人類学ならびに人類学的開発研究の研究拠点のひとつとしての国立民族学博物館の役割が飛躍的に強化された。

(3)みんぱく実践人類学シリーズ（明石書店刊行）として、『人類学と国際保健医療協力』『アフリカの人間開発――実践と文化人類学』『海洋資源の流通と管理の人類学』『北アメリカ先住民の社会経済開発』『グアテマラ内戦後　人間の安全保障の挑戦』『東南アジア・南アジア　開発の人類学』を刊行している（以降続刊)。このシリーズは、文化人類学が社会の要請にいかに応え、問題解決に貢献できる学問たりえるかを多角的に問うものであり、学界内外の幅広い読者を対象に、本研究で得た成果をもとにした実践的提言を発信するものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 21 件）

1. 岸上伸啓、文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察――アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から、国立民族学博物館研究報告、33 巻 4 号、2009 年、493-550 頁、査読有
2. 石田慎一郎・河村有教、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）におけるアジア・アフリカ法研究及び教育の動向、コンフリクトの人文学、1 号、2009 年、251-259 頁、査読無
3. 田村克己、東南アジアの民族問題と「ネーション」、平成 19 年度東南アジア大陸部における少数民族の地位と現状に関する調査報告書（ミャンマー総合研究

所)、2008 年、5-12 頁、査読無
4. 岸上伸啓、文化人類学的生業論――極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に、国立民族学博物館研究報告、32 巻 4 号、2008 年、529-578 頁、査読有
5. 岸上伸啓、「はまる」立場から――カナダ・イヌイット社会における社会経済開発、地域分析と技術移転の接点(高倉浩樹編)、9 巻、2008 年、13-64 頁、査読無
6. Kishigami, Nobuhiro, Homeless Inuit in Montreal, Études/Inuit/Studies, 32(1), 2008, pp.73-90, 査読有
7. 岸上伸啓、先進国における援助事業への文化人類学(者)の活用についての現状と課題、国際協力機構客員報告書、7 巻 39 号、2008 年、1-55 頁、査読無
8. 石田慎一郎、ケニアの民間開発、季刊民族学、123 号、2008 年、44-59 頁、査読無
9. 關 雄二、住民参加型のペルー遺跡観光、月刊みんぱく、31 巻 3 号、2007 年、6-7 頁、査読無
10. 關 雄二、文化遺産をめぐる国際協力、学士会会報、862 号、2007 年、126-131 頁、査読無
11. 關 雄二、モソコソさんとの出会い――もう一つの発掘、チャスキ、35 号、2007 年、1-3 頁、査読無
12. 石田慎一郎、ADR とメノナイト――アジア・アフリカにおける多元的法体制の新しい展開、法律時報、79 巻 12 号、2007 年、120-126 頁、査読有
13. 田村克己、立ち入れなかった世界――ビルマの農村、月刊みんぱく、30 巻 2 号、2006 年、7 頁、査読無
14. Matsuzono, Makio, Minpaku and Anthropology in Practice, Minpaku Anthroplogy Newsletter, 23, 2006, pp.1-2, 査読無
15. 關 雄二、世界遺産マチュ・ピチュの華やかさに隠れた出土品の所有権争い、チャスキ(アンデス文明研究会会報)、33 号、2006 年、68-72 頁、査読無
16. 岸上伸啓、都市イヌイットのコミュニティー形成運動、文化人類学、70 巻 4 号、2006 年、505-527 頁、査読有
17. Kishigami, Nobuhiro, Anthropological Research and Inuit Community Development in Montreal, Canada, Minpaku Anthropology Newsletter, 23, 2006, pp.3-4, 査読無
18. Kishigami, Nobuhiro, Inuit Social Networks in an Urban Setting, P.Stern and L. Stevensen (eds.) Critical Inuit Studies: An Anthology of Contemporary Arctic Ethnography, 1, 2006, pp.206-216, 査読有
19. Tamura, Katsumi, A Comparative Cultural Study between Japan and Myanmar. Myanmar and Japan Mutual Studies on History and Culture, The First MJC Forum Myanmar-Japan Center for Human Resources Development (MJC) Project Office, 2005, pp.82-91, 査読無
20. 樫永真佐夫、ベトナムの黒タイ村落における固有文字の継承、ことばと社会、9 号、2005 年、29-51 頁、査読有
21. 樫永真佐夫、ターイの昆虫食、ベトナムの社会と文化、5・6 合併号、2005 年、185-204 頁、査読有

〔学会発表〕(計 17 件)
1. 松園万亀雄、文化人類学の何が国際協力に役立つのか――基礎研究と応用研究をめぐって(一般公開シンポジウム「人類学の挑戦――これまでとこれから」)、国立民族学博物館・日本文化人類学会、2009 年 3 月 8 日、国立民族学博物館(大阪府)
2. 關 雄二、大量虐殺を記憶する装置――グアテマラにおけるある NGO の活動(一般公開シンポジウム「人類学の挑戦――これまでとこれから」)、国立民族学博物館・日本文化人類学会、2009 年 3 月 8 日、国立民族学博物館(大阪府)
3. 岸上伸啓、問題提起:みんぱくにおける実践人類学の展開―「文化人類学の社会的活用」(一般公開シンポジウム「人類学の挑戦――これまでとこれから」)、国立民族学博物館・日本文化人類学会、2009 年 3 月 8 日、国立民族学博物館(大阪府)
4. 岸上伸啓、先進国における援助事業への文化人類学(者)の活用についての現状と課題(第 6 回研究者と実務者による国際協力勉強会、JICA 大阪・民博・阪大 GLOCOL セミナー)、2008 年 10 月 31 日、JICA 大阪国際センター (大阪府)
5. Kishigami, Nobuhiro, Why is Subsistence Activity Important to the Inupiat and Inuit?: Considerations on Beluga Whale Hunting of the Nunavik Inuit in Canada and Bowhead Whale Hunting of the Inupiat in USA (A

Lecture Delivered for the Barrow Arctic Science Consortium's National Science Foundation Schoolyard Project), 2008 年 9 月 27 日, The UIC Research Center, Barrow, Alaska (USA)

6. Seki, Yuji, Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi, Masato Sakai, Mauro Ordoñz, Diana Alemán y Daniel Morales, Nuevas Evidencias del Sitio Arqueológico de Pacopampa, Sierra Norte del Perú (VI Simposio Internacional de Arqueología "El Período Formativo: Enfoques y Evidencias Recientes (Cincuenta Años de la Misión Arqueológica Japonesa y su Vigencia)), 2008 年 9 月 5 日, Pontificia Universidad Católica del Perú (Perú)
7. Seki, Yuji, Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi, Masato Sakai, Mauro Ordoñz, Diana Alemán y Daniel Morales y Daniel Morales, La Perspectiva del Proyecto Arqueológico Pacopampa como Experiencia de Cooperación Académica Internacional (Acto Académico conmemorativo de 50° Aniversario de la Misión Arqueológica Japonesa a los Andes), 2008 年 9 月 2 日, Universidad Nacional Mayor de San Marcos (Perú)
8. Ishida, Shin-ichiro, Legal Pluralism and Human Rights in a Kenyan Court: An Analysis of 'Dowry' Claim Cases, Law and Society Association, 2008 年 5 月 30 日、Hilton Bonaventure, Montreal, Canada
9. Kishigami, Nobuhiro, Urban Inuit in Canada: Their Life and Problems in Montreal (A Lecture Delivered for the Barrow Arctic Science Consortium's National Science Foundation Schoolyard Project), 2008 年 3 月 1 日, UIC Sicience Center, Barrow, Alaska (USA)
10. Kishigami, Nobuhiro, Introduction to the International Development Cooperation of the Dutch Organizations and World Bank (The Fifth International Workshop on Development Cooperation: International Cooperation of the Institute of Social Studies (ISS) and NGOs in the Netherlands and World Bank), 2007 年 12 月 1 日, National Museum of Ethnology, Osaka, Japan.
11. Seki, Yuji, Actividades ceremoniales y seculares en la plaza cuadrangular hundida de la tercera platafoma del sitio Formativo de Pacopamapa (Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso と共同発表), Universidad Católica de Santa María, 2007.10.31, Arequipa.,Perú
12. Kishigami, Nobuhiro, Introduction to the Symposium 'Development Cooperation of Norway'(International Symposium "Development Cooperation of Norway: University of Bergen, CHR. Michelsen Institute, and NGOs), 2006 年 11 月 23 日、National Museum of Ethnology, Osaka, Japan
13. 松園万亀雄、文化人類学と開発援助――グシイの家族計画を中心に（特別講演）、日本熱帯医学会・日本国際保健医療学会、2006 年 10 月 13 日、長崎ブリックホール（長崎県）
14. Kishigami, Nobuhiro, Homeless Inuit in Montreal: How to Survive in the Hopeless City (the Symposium Session: Aboriginal Peoples in Cities, Identity and Human Nature), The Canadian Anthropology Society Conference, 2006 年 5 月 16 日、Concordia University, Montreal, PQ, Canada
15. 田村克己、地域開発の未来――人類学者の立場から（趣旨説明）、国立民族学博物館友の会講演会、2006 年 1 月 21 日、広島大学東千代田キャンパス（広島県）
16. Seki, Yuji, El cambio del manejo del poder del perí Formativo en la sierra norte del Perú: desde el punto de vista de la dieta alimenticia (Minoru Yoneda と共同発表), Tercer Congreso Internacional de Peruanistas en el Extranjero（国際ペルー研究者会議）, 2005 年 10 月 14 日, Universidad Nanzan（愛知県）
17. Seki, Yuji, El cambio socio-económico de la sociedad del período formativo en la Sierra Norte del Perú: desde el punto de vista de la dieta alimenticia（Minoru Yoneda と共同発表）, XII Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe（第 12 回ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟

(FIEALC)研究大会), 2005.9.27, Roma

〔図書〕(計 12 件)

1. 關　雄二・狐崎知己・中村雄祐（編)、明石書店、グアテマラ内戦後　人間の安全保障の挑戦、2009 年、278 頁
2. 松園万亀雄・門司和彦・白川千尋（編)、明石書店、人類学と国際保健医療協力（みんぱく実践人類学シリーズ 1)、2008 年、214 頁
3. 松園万亀雄・縄田浩志・石田慎一郎 (編)、明石書店、アフリカの人間開発――実践と文化人類学、2008 年、354 頁
4. 關　雄二・染田秀藤 (編)、世界思想社、他者の帝国――インカはいかにして「帝国」となったか、2008 年、396 頁
5. 岸上伸啓（編)、明石書店、海洋資源の流通と管理の人類学、2008 年、324 頁
6. 岸上伸啓（編)、明石書店、北アメリカ先住民の社会経済開発、2008 年、307 頁
7. 岸上伸啓、世界思想社、カナダ・イヌイットの食文化と社会変化、2007 年、346 頁
8. 樫永真佐夫、風響社、東南アジア年代記の世界――黒タイの《クアム・トー・ムオン》、2007 年、60 頁
9. 樫永真佐夫・カム・チョン、国立民族学博物館、黒タイ首領一族の系譜文書、2007 年、198 頁
10. 關　雄二、京都大学学術出版会、古代アンデス――権力の考古学、2006 年、315 頁
11. 關　雄二・青山和夫（編)、岩波書店、アメリカ大陸古代文明事典、2005 年、386 頁
12. 岸上伸啓、中央公論新社、イヌイット「極北の狩猟民」のいま、2005 年、224 頁

〔その他〕
ホームページ等
http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/17401041.html
（国立民族学博物館ホームページ)

６．研究組織

(1)研究代表者
田村　克己(TAMURA　KATSUMI)
国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
研究者番号：40094156

(2)研究分担者
松園　万亀雄(MATSUZONO　MAKIO)
国立民族学博物館・館長
研究者番号：00061408

關　雄二(SEKI　YUJI)
国立民族学博物館・先端人類科学研究部・教授
研究者番号：50163093

岸上　伸啓(KISHIGAMI　NOBUHIRO)
国立民族学博物館・先端人類科学研究部・教授
研究者番号：60214772

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
樫永　真佐夫（KASHINAGA　MASAO)
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授
研究者番号: 10342643

石田　慎一郎(ISHIDA　SHINICHIRO)
大阪大学・人間科学研究科・特任助教
研究者番号： 10506306